

活き仏

野村胡堂

—

「親分、面白くてたまらないという話を聞かせましようか」

ガラツ八の八五郎は、膝つ小僧を気にしながら、真四角に坐りました。こんな調子で始めるときは、お小遣こづかいをせびるか、平次の知恵の小出しを引出そうとする下心があるに決っております。

「金儲けの話はいけないが、その外の事なら、大概たいがい我慢をして聴いてやるよ、惚のろけ気なんざいちばん宜いね——誰がいったいお前の女房になりたいって言い出したんだ」

銭形平次——江戸開府以来の捕物の名人と言われた銭形平次は、いつもこん

な調子でガラッ八の話を受けるのでした。

「そんな氣障きざんな話じゃありませんよ。ね、親分」

「少し果し眼になりやがったな」

「音羽の女殺しの話は聴いたでしょう」

「聴いたよ。お小夜とか言う、良い年増が殺されたんだってね、——商売人あがりで、殺されても不足のねえほど罪を作っているというじゃないか」

二三日前の話でしょう、平次はもうそれを聴いて居たのです。

「商売人上りには違えねえが、雜司ぞうしガ谷や名物の鉄心道人の弟子で袈裟けさを掛けて歩くすこ凄すこい年増だ。殺されたとたんしるものに紫の雲がおりて来て、通し駕籠で極楽へ行こうという代物だからおどろくでしょう」

「なるほど、話は面白そうだな。もう少し筋を通して見な」

平次もかなり好奇心を動かした様子です。

「鉄心道人のことは、親分も聴いているでしょう」

「大層あらたかな道者だつて言うじゃないか。やっぱり法螺ほらの貝を吹いたり、護摩ごまを焚たいたりするのかい」

「そんな事はしねえが、説教はする。八宗兼学の大した修業者だが、この世の欲を絶つて、小さい庵室あんしつに籠り、若い弟子の鉄童といっしよに、朝夕お経きょうばかり読んでいる」

「で？」

「それで暮しになるから不思議じゃありませんか。ね、親分」

「――」

平次は黙つてその先を促うながしました。合槌あいづちを打つと何処まで脱線するかわかりません。

「尤もつとも信心の衆は、加持祈禱をして貰つたと言つちや金を持って行く。が、鉄

心道人はどうしても受取らねえ。罰ばちの当った話で——」

「そう言う手前の方が余っほど罰当りだ」

「米や味噌や、季節の青物は取るそうだからまず命には別条ない——」

「それから何どうした」

八五郎の話のテムポの遅さにじれて、平次はやけに吐はい月峰ふきを叩きました。

「だから、音羽から雑司ガ谷目白へかけての信心は大変なものですよ。あの辺へ行ってうっかり鉄心道人の悪口でも言おうものなら、請うけあ合い袋叩きにされる」

「で——」

「お小夜の殺された話は、鉄心道人の事から話さなくちゃ筋が通りませんよ。」

何しろ、明日という日は鉄心道人の庵室へ乗り込んで、朝夕の世話をする事になつて居た女ですからねエ」

「梵妻だいきくになるつもりだったのかい」

「飛んでもない。鉄心道人の教えでは、女犯によはんは何よりの禁物で、雌猫めすねこも側へは寄せない」

「お小夜は雄猫と間違えられた」

「冗談じゃない、——多勢の弟子の中から選ばれて、道人の側近くつか仕えながら、朝夕教えを聴くことになったんだから大したものでしょう」

「それから」

「明日はいよいよ音羽から雑司ガ谷中の信者総出で、お小夜を庵室に送り込もうという矢先かんじんき、肝腎のお小夜が脇差でなぶり殺しにされたんだから騒ぎでしょう」

「なぶり殺し？」

「十二三カ所も傷があつたそうだから、なぶり殺しに違いないじゃありませんか。よほど深い怨みがあつたんでしょう」

「急所を知らないんで、無闇矢鱈やたらにきつたかも知れないな」

「でも、下手人は武家らしいという話ですぜ」

「武家？」

「お小夜が勤めをしている頃の深間ふかまで、浅川団七郎という弱い敵役見たいな名前の浪人者があつたんですって」

「フム」

「その浪人者が、チヨイチヨイお小夜のところへ来たんだそうで、——米屋の越後屋兼松えちごやが、お小夜の家で三度も逢っていますよ」

「それで」

「お小夜が殺されてから姿を見せないところを見ると、その野郎が一番怪しくなります」

「お小夜は綺麗な女だったのかい」

平次は話題を転じました。

「綺麗というよりは凄[、]い女でしたよ。あ[、]っ[、]しの逢[、]ったのはもう三年も前だが――

ガラツ八は話しつつづけました。

お小夜は三年前まで三浦屋でお職^{しよく}を張っていたのを、上野の役僧某に請出^{うけだ}されて入谷に囲われ、半年経たないうちに飛び出して、根岸の大親分の持物になりましたが、そこも巧^{たく}みに後足で砂を蹴^めって、千石取の旗本某の妾^{めかけ}になり、三転四転して、有名な立女^{たておやま}形中村某の家の押掛女房になったりしていました。

そんな事も、長く続いてせいぜい半年くらい、鮮^{あざや}かに転身して、音羽に世帯を持ったのはこの春あたり。しばらくは、下女一人猫の子一匹の神妙な暮しをつづけて居るうち、何時からともかく鉄心道人のところに通い始め、紅も白粉も洗い落して、半歳余りの精進をつづけた後、鉄心道人にその堅固な信心を見

込まれ、薪水まきみずの世話をするために、別棟べつむねながら、道人の起居する庵室に入ることになつたのです。

「ね、親分。勿体ないじゃありませんか」

八五郎はこう言つて、額を叩くのでした。

「勿体ないつて奴があるかい」

「とにかく、三浦屋のお職まで張つた女が、袈裟けさを掛けて数珠じゆずを爪つまぐ繰りながら歩くんだから、象ぞうの上に乗つけると、そのまま普賢菩薩ふげんぼさつだ」

「宜い加減にしないかよ、馬鹿馬鹿しい」

「色白で愛嬌があつて、こう下ぶくつ脹れで眼の切れが長くて、唇が真つ紅で——
好い女でしたよ、親分。その熟れきつた良い年増が、庵室に入つていよいよ尼
さんの玉子になろうという前の晩、滅茶滅茶に斬られて死んだんですぜ。こい
つは近頃の面白い話じゃありませんか、御用聞冥利みようり、ちよいと覗いて見ません

か、親分」

ガラッ八の八五郎は生得の順風耳じゅんぷうじを働かせて、江戸中からこんな怪奇なニュースを嗅ぎ出して来ては、親分の平次の出馬をせがむのでした。

二

『玉の輿のろいの呪』(第三卷参照)以来、平次の腕に心から推服している三つ股の源吉は、このお小夜殺しをすっかり持て余してしまつて、五日目には平次のところへ助け舟を求めに来たのでした。

「銭形の親分、俺にはどうも見当が付かねえ。十手捕縄を預つて、そんな事を言つちや、お上に対しても済まねえわけだが、縄張りのうちに殺しがあるといふのに、五日も経つて下手人の匂いのあるのさえ挙げ兼ねたとあつちや、俺の

顔が立たねえ。濟まねえが知恵をかしてくれないか」

他の御用聞と異つて、錢形平次なら、無暗な功名争いをする筈もなく、三つ股の源吉の顔の潰れないように、一件を始末してくれるだろうと思つたのです。

「宜いとも、俺で役に立つ事なら」

錢形平次は何んの蟠りもなく御輿みこしをあげました。

源吉に案内させて、八五郎と一緒に音羽へ行つて見ると、何もかも濟んだ後で、錢形平次でも手の付けようはありません。

お小夜の家はもとのままですが、たった一人の下女のお米は調べが濟むまで里へ帰すこともならず三毛猫みけねこといっしょに淋しく暮しております。

「お前の家はどこだえ」

「厚木あつぎぎ在だよ」

平次の問いに対して、妙に怒っているような調子です。年頃は十八九、番茶

なら少し出過ぎたくらいですが、むくつけき様子を見ると、江戸へ来て、まだ三月とは経っていないでしょう。



「あの晩どうしていたんだ」

「風呂へ入って来て、御新造さんへ声を掛けて寝ただ。翌る朝お隣りの皆次さんに、雨戸が開いているぞと声を掛けられて、びっくりして飛び起きて見ると、御新造さんは殺されて居たでねえか」

むくつけき娘ですが、相模言葉ながら、思いの外達弁にまくし立てます。

「風呂から帰って声を掛けたとき、返事がなかったのか」

「よく眠って居るべえと思っただよ」

「そのとき雨戸は閉って居たのかい」

「私はお勝手から入ったから、御新込さんの雨戸は知らねえよ」

それでは何んにもなりません。

「日常、ここへ出入りするのとはどんな人たちだ」

「お隣の皆次さんと——これは紙屋さんだよ。地主の寅吉さんと、庵室の鉄童

さん、それから米屋の兼松旦那、尤も米屋の旦那は滅多に来ねえだよ」

「それつきりか」

「もう一人、御浪人の浅川団七郎とか言う人がときどき来るが、おらは後姿しか知らねえだよ」

「よしよし、そんな事でたくさんだろう」

平次はそれ以上を聴こうともしません。

「いちばん繁々しげしげ通うのは誰だい」

ガラッ八は後ろから口を出しました。

「地主の寅吉とか言う男だ。訊きかなくたって解きっているよ」

平次は一番先に寅吉を挙げた下女の言葉の調子から、そのくらいのことは判断している様子です。

「お小夜が殺された晩、誰も来なかつたかい」

とガラッ八。

「地主の寅吉旦那が来ただよ、話がこんがらかった様子で、御新造さんと何にか言い合っていたのだが——おらは御新造さんにせき立てられて、表の湯屋へ行ってしまったから、どう納まったか後は知らねえ」

平次はそれを聴くと後ろをふり向きしました。三つ股の源吉はその寅吉を縛らずにいる筈はないと思ったのです。

「寅吉は一応引立てて見たが、どうしても小夜を殺したとは言わねえ、——盗られた物はなし、寅吉より外に、下手人の匂いのするものもないが」

源吉はすっかり投げて居ります。

「浅川団七郎という浪人者は」

「そいつはまるで雲を掴むつかような話だ。お小夜のところへ来る時は、大抵頭巾ずきんを冠っていたそうだし、お小夜はおくびにも出さなかつたから、何処に住んで

いるか、まるつきり見当がつかねえ。越後屋の主人が確かに顔を見たと言っているが、色白で四十前後で、ベツトリと濃い青髯あおひげの跡のある、とだけじゃ——そんな浪人者は江戸に何百人いるか解らない」

三つ股の源吉の言うのは尤もつともでした。

「八、こいつは思ったよりむずかしいぜ。当分神田へ帰らねえことにして、音羽へ泊り込むとしようか」

銭形平次がそんな事を言うのですから、よくよくの難事件と見込んだのでしよう。

三

下女のお米を責せめたところで、大した証拠も上らなかつたので、平次はその

足を伸のして、雑司ガ谷の鬼子母神裏にある鉄心道人の庵室を訪ねました。

多寡たかが厄病神のような流行物はやりもの——と鼻であしらって来た平次も、庵室へ行つて見て、まるつきり予想と違っているので驚きました。竹の柱に茅かやの屋根という小唄の文句の通りの見る影もない庵室の奥に、修業者鉄心道人はささやかな仏壇を前にして読経中で、その後ろに居流れた善男善女は、一本気の信心に凝こり固こまった、朴訥ぼくとつそのものの姿を見るような人達ばかりでした。

鉄心道人は四十前後のまだ壮年の修業者で、細面の眼の大きい、強烈な精神力の持主らしい様子までが、平次に好感を持たせます。

——こ奴はただの山師ではないぞ、——

平次はそんな事を考えながら、開けっ放した庵室の中を見ておりましたが、読経の声凛々りんりんと響き渡ると、それに合せて念仏を称える善男善女の声が、一種の情熱的なりズムになって、平次の齋もたらした世俗の『御用』などは通りそうもあ

りません。

平次はそつと裏口の方へ廻りました。

二十歳ばかりの目鼻立の柔和な若い弟子が、腰衣こしころもを着けたまま井戸端で水を汲んでいたのです。

「お前さんは鉄童さんと言うんだね」

「ハイ」

折目の正しい返事に、平次も少し面喰いました。

「お小夜が殺された話は知ってるだろうね」

平次の問いの気のきかなさ。

「それはもう、よく存じておりますよ」

鉄童は莞爾にっこりとして手桶をおきました。

「お前さんはどう思いなさる」

「誰が殺したか、見当ぐらいは付くだろう」

「その見当が付けば——」

鉄童は皮肉な微笑を浮べて、平次の腰のあたりを見るのです。「還俗げんぞくして御用聞になる』とでも言いたいところだったでしょう。

「お小夜が殺されて喜んでいるものがあるだろう」

平次は我にもあらず愚問ぐもんを連発しました。

「私も喜んでおりますよ」

鉄童の答えの意外さ。

「？」

「あれは法難でございました。——心を入れ換かえたと言つても、お小夜殿はあの通り美しい。お師匠様のお側には置きたくない方でしたよ」

「？」

「上野の役僧が一人、お小夜殿のために寺を追われました。入谷の親分が一人、子分に見放され、千五百石の旗本が潰れ、名題役者が一人首を縊りました。――

――外面如菩薩、内心如夜叉、――恐ろしいことでしたよ」

鉄童はそう言って、目の前で数珠を振るのです。

「あの晩、お前さんはどこに居なすった」

平次の問いは唐突で乱暴でした。

「庵寔に居りましたよ、――間違っちゃいけません。私には羅刹女を解脱させる法力はありません」

謎のような言葉を残したまま、鉄童は手桶を提げて庵室へ入って行きました。

もういちど表へ廻ると、信心の男女は大方散って、庵主の鉄心道人が、若い男と何やら事務的なことを打合せております。

「越後屋の兼松だよ」

三つ股またの源吉はそつと囁やきました。雑司ガ谷から音羽へかけての物持で、手広く米屋をやつて居る兼松は、鉄心道人の第一番の大檀だんな那で、庵室を建ててやったのも、諸経費の不足を出してやるのも、みんなこの男の篤志とくしだということです。

「越接屋さん、銭形の親分が、道人に少し訊きたいことがあるそうだよ」
源吉は兼松をさし招いてこさう囁ささやきました。

「それは困りました」

越後屋兼松は渋い顔をしました。この盲信者を取つては、岡つ引と鉄心道人とは、全く世界の違った人間のように思っている様子です。

「お上の御用を勤める方に不自由をさせてはいけない。私が逢いましょうよ、越後屋さん」

後ろから静かに声をかけたのは、鉄心道人でした。歳の割には若々しい声で、何んでもないことがひどく人の心持に沁しみ入ります。八宗兼学の大智識というにしては、少し人間味があり過ぎますが、柔かい次低音バリトンには一方かたでない魅力のあることは事実です。

「お小夜が殺されたことは聴いたでしよな」

「いかにも聴きましたよ」

平次の突っ込んだ調子を、鉄心道人は柔やわらかに押し包みました。

「下手人の心当りはありませんか」

「いや少しも、——気の毒なお小夜殿。なぶり殺しに逢うほどの罪はなかった筈だが——」

鉄心道人は眉まゆを垂れて、何やら暫らくは念じております。

「鉄童さんはその晩、確かに外へ出なかつたでしよな」

「出るわけはありませんよ、庵室はこの通りたつた二た間、鉄童が臥返ねがえりを打つたのも解ります」

鉄心道人の言葉には何んの疑いを挟みようもありません。平次は自分ながらこの掛け合いの不手際さにじれ込んでおります。

こうなると平次は、丁寧に挨拶をして引揚げる外に術てがありません。もういちど井戸端に廻ると、弟子の鉄童は盥たらいの前にキッチンと坐つて一生懸命洗濯をしております。

「この水は良いだろうな」

「江戸一番の良い水ですよ、この辺は高台だから」

平次の問いに、無造作な調子で鉄童は答えます。

「一杯呑みたいが、柄杓ひしゃくか茶碗を借りたいな」

「ハイ」

鉄童は寺住居の者らしい気軽さで、なぎなたぞうり長刀草履を穿いたままお勝手に戻り、中へ入って茶碗を一つ持って来てくれました。

一と瓶つるくくみ上げて、一杯キューツと呑んだ平次、

「甘露甘露、なるほどこれは良い水だ」

十一月の水の味は格別だったのでしよう、平次は舌を鳴らしてもう一杯傾かたむけます。

「親分、止しましょうよ。そいつは何杯呑んだって酔よいはしませんぜ」
ガラッ八はそんな事を言っつて眺めているのです。

四

「銭形の親分さん」

目白坂まで来ると、後から追いつき加減に声をかける者があります。

「越後屋さんじゃないか」

平次は足を淀ませました。

先刻庵室で挨拶した米屋の兼松が、何にか言いたい事がある様子で後から来たのでした。

「下手人のお見込みが付きましたか、親分さん」

兼松は少し息をきらしております。

二十八九、せいぜい三十くらい、若いにしては分別者らしい男で、浅黒い引ひき緊しまった顔にも、キリリと結んだ口にも、やり手らしい気魄きはくがあります。

「少しも判らない、困ったことに日が経ち過ぎたよ」

妖艶なお小夜も知らず、その殺された後の惨澹さんたんたる有様も見なかつた平次は、後から証拠をたぐるじれつたさに閉口している様子です。

「御尤もですが、地主の寅吉さんだけは下手人じゃございませんよ、親分」

「それはどう言うわけだ」

平次はツイ開き直りました。それほど兼松の調手が断乎としていたのです。

「寅吉さんを縛った三つ股の親分さんにはお気の毒ですが——」

「——」

兼松の眼は、チラリと源吉を見やりました。この御用聞が以てのほかの機嫌なことは、そのそつぽを向いた頬のあたりの痙攣けいれんでも判ります。

「御存じかも知れませんが、同じ音羽に住んで、お互に何んとか人に立てられるだけに、私と寅吉さんは仲が悪うございます。それにつけても、寅吉さんが人殺しの罪を被きて、お処刑しおきに上るのを見ちゃいられません」

「？」

兼松の一生懸命さが、妙に平次を引入れました。

「あの晩寅吉さんが、お小夜の家を出て来るのを、私は確かにこの眼で見届けました。先刻まで近所へ聞えるほど言い争って居たのが、どう仲直りしたのか、鼻唄でも歌い出したい様子で、ニヤニヤしながら出て来たくらいですから、人なんか殺したんでない事はよく判ります。それに路地へ射して来る灯あかりでよく見ましたが、寅吉さんは脇差も出刃庖丁でばぼうちようも持ちませんでした。後ろから灯を差出して、寅吉さんの足許を見せてやっていたのは、お小夜だったかも知りません。そのころ下女のお米は風呂へ行っていたそうですから」

「お前さんは何用があつて、そんなところにいたんだ」

平次の問いは峻烈しゅんれつでした。

「私はいろいろ道人様のお世話をしておりますから、明日庵室へ入るといってお小夜の様子を見に来ましたが、寅吉さんが出て来たのを見ると、出過ぎたことをするんでもないと思つて、そのまま引返しました」

兼松の答えははっきりしております。

「お前さんと寅吉とは余っ程仲が悪かったんだね」

「へエ、——世間では何んとか申します。行違ひは去年のお祭の揉め事からで——」

兼松と寅吉と仲の悪いのは、同じ音羽の物持で、両雄並び立たぬためだったでしょう。

「お前さんはお小夜をどう思っていたんだ」

「道人様が側近く召されるのを、かれこれ言つては悪いと思つて差控えていましたが、正直のところあまり好きじゃございませんでした」

と兼松。

「寅言は？」

「寅吉さんはお小夜のところへしげしげ繁々通つていたようで、これは町内で知らない

者はありません。尤もお小夜は何んと言っていたか、そこまでは判りませんが」

「寅吉も庵室へ出入りするのか」

「飛んでもない」

兼松の様子では、寅吉は縁なき衆生しじゆうせいのようです。

「外にお小夜を怨んでいる者は？」

「算かぞえきれないほどあります。ことに近頃ちよいちよい姿を見せる浅川団七郎

――

兼松はそう言って、脅おびやかされたように、ゴクリと固唾かたずを吞みました。

「浅川という浪人者は始終ここへ姿を見せるのかな」

「お小夜が殺された晩も、頭巾ずきんで顔を隠して、路地の外をうろうろしていた様

子でした」

「その浪人者の住居は？」

「そこまでは存じません。ときどき後ろ姿を見て、お小夜に訊いて浅川団七郎という名前を知っただけです。来る日は前以つて下女のお米をお使いか、風呂か、遊びに出す様子でした。お小夜は賢い女かしこでしたから、変な浪人者の訪ねて来るのを、誰にも知られなくなかったのでしょうか」

越後屋兼松の説明は、此方で望む以上に行届きます。

「お前さんは、浅川とか言う浪人者に逢ったことがあるそうじゃないかと平次。

「たった一度ありました。一と月ばかり前、蒸し暑い日で、さすがに頭巾を冠つてはいられなかったのでしょう。お小夜の家格子戸の中で、覆面頭巾をヒョイと脱ぬいだのを見てしまったのです」

「人相は？」

「四十前後の良い男でございました。何より色白の顔と、青岱せいたいを塗つたような、

両頬の青髯の跡が目立ちました」

「外には誰も浅川団七郎の顔を見た者はないだろうな」

「さア」

「親分、——外にも浅川団七郎の顔を見た者がありますよ」

ガラツ八は横合から口を出しました。

「誰だい」

「そいつは滅多に言われませんよ、半襟一と掛け奢る約束で聞込んだネタで」

「大層奮はずみゃがったな」

「それ程でもねえが——」

「ハツハツハツ」

平次は何んとはなしに空を仰いで笑いました。初冬の空は申分なく澄みきつて、夕陽はもう目白の林に落ちかかっております。

五

寅吉の女房にも逢つて見ましたが、これは嫉妬しつとと心配で半病人のようになつて
いるだけで、何んの役にも立ちません。

最後にもういちどお小夜の家へ平次と八五郎と、三つ股の源吉と、越後屋の
兼松と立ち寄りました。

お米の言葉と、源吉の調べとを併あわせて、もういちど平次の頭で整理して見ま
したが、下手人はお小夜の知己ちぎで、木戸を開けて狭い庭から通して貰つて、一
気にお小夜を殺して帰つたというほかには何んの手掛りもありません。

十二三カ所の傷だったと言いますが、ツイ近所げきの人も、宵のうちの殺人騒
ぎを知らなかったところを見ると、多分最初の一撃げきで致命的な傷を与え、声を

出す力も騒ぐ力もなくなつたものでしょう。そう考えるとやはり、下手人は明日の庵室入りをくい止めようとする、必死の怨みか妬みねたを持つたものという事になります。

「八、お米を呼んで来てくれ」

「へエ——」

八五郎は隣の部屋で神妙に縫物をしている下女のお米を呼んで来ました。

「俺は半襟一と掛なんてケチな事は言わねえ、帯でもあわせ裕でも買ってやるから、

浅川団七郎という浪人者の素姓を知ってるなら話してくれ」

平次はいきなり高飛車に出ました。

「そいつは違やしませんか、親分」

以ての外の顔をしたのは八五郎です。

「黙っている、明日まで引延していて、どんな事になるかも判らない——なア、

お米、知ってる事は皆んな申上げた方が宜いよ」

平次は何時ものたしなみに似ず、懐から十手を覗かせたりするのでした。

「何んにも知らねえだよ、御浪人の後ろ姿を二度ばかり見たただけだよ」

お米は何に脅おびえたか、頑固に頭を振ります。

「お前は何にか知っているに違いない。言わなきや縛おびって行くが、どうだ」

「知らねえだよ、おらは、何んにも知らねえだよ」

お米は部屋の隅にピタリと引おび込んで、脅おびえきつた猫のような眼を光らせます。その無智な頑固さを見て取ると、力攻めで急に口を開けさせるわけには行かないと見たか、

「八、気の毒だがこれからすぐ三浦屋へ行つてくれ。お小夜が勤めをしている時分の深間を一人残らず手繰たぐり出すんだ。それから下つ引を五六人狩り出して、この三年間お小夜に係り合つた人間を調べ上げて見るが宜い。その中に浅川団

七郎という浪人者がいると判ったら、下手なちよつかいを出さずに、居所だけを突き留め、遠巻に見張って、すぐ俺のところへ言って来い、——明日の朝までだぞ、宜いか」

「合点だ」
がってん

ガラツ八はもう、尻を七三に端折っておりまして。親分の様子で、事件がようやく峠を越したことが判ったのでしよう。

八五郎の後ろ姿を見送って、平次はすぐお小夜の家の隣——と言っても、これは音羽の通りに面した紙屋の皆次の店へ入りました。

「あ、親分さん方」

皆次は二つ三つづけ様にお辞儀をしました。二五五六のまだ若い男で、額の狭い、鼻の低い、少し出ツ歯で、小柄で、平凡そのもののような男です。

「浅川団七郎という浪人者が、時々お小夜のところへ来たそうだが、お前は氣

が付かなかつたかい」

平次の問いは誰も予期しないような種類のものでした。

「いえ、一向見たこともありません。——お小夜さんのところへ出入りする人間で私が気が付かない筈はないんですが——」

「その通りですよ、この人は間すきがな隙すきがなお小夜さんの家ばかり覗のぞいていたんですから」

店の奥から我慢のならぬ注ちゆうを入れたのは、年上らしい女房のお秋でした。これは頑強で、真っ黒で、牝牛めうしのような感じの女です。

「お前は黙って引ッ込んでいろ、——親分方の前じゃないか、馬鹿ッ」
皆次は精いっぱい亭主の威厳いげんを示すのでした。

「その浪人者があの晩も顔を隠して、この路地へ入って来たそうだが——」
「少しも気が付きませんよ、親分さん」

「それじゃ、あの晩、この路地を誰と誰が通ったんだ」と平次。

「地主の寅吉さんは通りました。それから下女のお米さんが表の湯へ行つて歸つて、——其処にいらつしやる兼松さんも、ちよつと覗いてそのまま歸つた様子でしたが」

それだけ見張つて居れば、女房のお秋が嫉妬やきもちを焼くのも無理のないことです。「人一人殺されるというのに、物音も何んにも聞えなかつたのか」

「お米さんが湯へ行くと間もなく、私の方も店を閉めてしまいました。目白の鐘かねが亥刻よつ（十時）を打つと、何時でもそうするのですが——」

「それじゃその後で下手人が来たのかも知れないな」

「そんな事かもわかりません」

「お前さんは外へ出なかつたかい」

「出やしません。女房や小僧にも訊いて下さい、——お小夜さんはあの通り綺麗だったから、いろいろ罪を持っていく様子でしたが、私などには振り向いてもくれません」

皆次は先を潜って弁解をしているのです。

六

翌る朝、三つ股の源吉のところへ泊っている平次のところへ、一番先に駆けつけたのは、越後屋の兼松でした。

「銭形の親分さん、困ったことが起りました」

米屋の主人の聰明な顔が、ひどく困惑こんわくしております。

「何んだえ、越後屋さん」

「庵室の鉄童さんが見えなくなりました」

「そうか」

平次はひどく落着いております。

「そいつが下手人で、危なくなつて風をくらつたんじゃないね」

三つ股の源吉は半分顔を洗つて飛出します。

「大丈夫だ、庵室から一と晩出なかつたというのは本当だろう、鉄童は下手人じゃない。第一そんな虐^{むじ}たらしい殺しようをしたなら、返り血の始末だけでも大変だ。着のみ着のままの鉄童にはそんな暇はなかつた筈だ。それに——」

平次は何にか外の事を考へている様子です。

「じゃ、何処へ行つたんでしよう」

兼松はひどく気を揉^もんでいる様子です。

「こいつは言わない方が宜いだらうと思つたが、——そんなに心配をするなら

話してやろう。あの鉄童という人間は、自分の素姓が解りそうになって逃げ出したんだ」

「素姓？」

「どうかしたら、庵主の鉄心道人が逃がしたかも知れない」

「それはどう言うわけでしょう、親分さん」

兼松は縁側へにじり上っております。平次の言葉には何にかしら容易ならぬものがあります。

「驚いちゃいけないよ、——あの鉄童というのは男じゃない」

「えッ」

「世間体をはばかって男にしておいたんだろう。話の調子も、身体の様子も、間違いもなく男だが、きのう庵室の裏の井戸端で洗濯をしているのを見ると、^{たらい}盥の前にキチンと坐っている。男なら盥を跨^{また}いでやるところだ。不思議でたま

らないから柄杓ひしゃくか茶碗を貸してくれというと、チヨコチヨコと刻み足に駈け出して、草履ぞうりを内輪に脱いだ」

「——」

「声も男にしては細いし、よく気をつけて見ると、咽仏のどほとけが見えない」

平次の言葉は争う余地ありません。

「そんな事が、——そんな馬鹿な事が——」

兼松はゴクリと固唾かたずを吞みました。恐ろしい幻滅に直面して、しばらくは分別を纏め兼ねた様子です。

「お前さんの信心にお節介をするわけじゃないが、こんな事を隠しておく方が罪が深いだろう。あつしは唯の岡っ引だから、相手に遠慮はしてられない。

まして、寺社の御係り外の、言わば潜りのお宗旨は、気の毒だが一々庇っちゃ
いられないよ」

「鉄心道人というのは、なかなかの偉物らしいが、女を男に仕立てて、庵室へ寝泊りさせるようじゃ、大した生仏様でもあるまい。鉄童が逃げ出したのは、大方この平次に女と覺られたと感づいたためだろう」

平次の言葉には、判官の烈しさと、人間らしい思いやりとがありました。

「それじゃいよいよ以って、あの鉄童が怪しいじゃないか。自分が女なら、お小夜のような凄^ひい女が入って来るのを、黙って見ている気にはなるまい」

三つ股の源吉は、新しい論理を組み立てました。

「その通りだ。俺も鉄童が女と判ったとき、余つ程引つ立てようかと思つたが、お小夜を殺したのはどうも鉄童らしくない。宵のうちの人目を避^さけて、坊主頭があゝの路地へもぐり込めそうもないからだ」

「頭巾を冠って、浅川団七郎に化けるとしたら？」

源吉の想像はすばらしい飛躍ひやくを遂げました。

「俺もそれを考えている。庵室から出ないというのは、鉄心道人の言葉だけだから、信用は出来ない。——とにかく、——八五郎が帰って来て、浅川団七郎の素姓と居所が判りさえすれば、目鼻が付くと思う」

平次はそればかりを頼みにして居る様子です。が、八五郎が帰って来たのは、その日も暮れて、平次がもう諦めて神田へ引揚げようと言う時でした。

七

「親分、お小夜はありや人間じゃねえ」

ガラッ八は息を継ぐいとま違もなく、驚きをブチまけるのでした。

「何を聴き出したんだ、八」

「話しになりませんよ、親分。あの女は幾つ身上しんしょうをフイにして、幾人の人間を殺しているか判りやしません、——一番堅そうな男に喰い付いて、自分の思う通りになるまで、手をかえ品を換え揺すぶるんだ。身上も、生命も吸い取ると、蜘蛛くもの巣に引つ掛つた虻あぶのようにされて、何んの未練もなく振り捨てられるんだ。恐ろしい女があつたものさ、——鉄心道人だつてその餌の一人さ。あの女がもう二月三月生きていると、清水寺の清玄のようにされて、首でも縊くるか、身でも投げるか、地獄へ真つ逆様に落ちるより外に道はなかったんだ」

仏説らせつきじよの羅刹鬼女——そんなものをガラツ八は考えていたのでした。

「そんな事は解っているよ。鉄心道人はもう半分地獄おに堕ちている。それより浅川団七郎の方はどうしたんだ」

「それですよ、親分」

「何がそれだ」

「下つ引五人に手伝わせて、一日一と晩江戸中を捜し、お小夜の行った先々を
当って見たが、そんなケダモノはどこにも居ねえ」

「何んだと？」

「浅川にも、深川にもお小夜は見識けんしきが高いから、素浪人や貧乏者を相手にする
女じゃありません。三浦屋に勤めている頃から、音羽へ引つ込むまでの間に、
お小夜と係り合つた男も少くないが、みんな身分の者ばかりで、浪人者などは
寄せつけもしませんよ」

「フーム」

「お小夜の気じゃ大名のお部屋様にでもなる心算つもりでいたんでしよう」

「本当に浅川団七郎という浪人の事を聞かないのか」

「聞きませんよ」

「フーム」

「あんまり馬鹿馬鹿しいから、帰りにちよいと音羽の家へ寄って、あのお米とか言う下女に当って見たが——」

「あれは田螺たにし見たいな女だ。どうしても口を開かねえ」

平次もお米の剛情には驚いている様子です。

「ところが、あつしには皆んな言ってしまったよ。半襟一と掛けにも及ばねえ、——浅川なんて浪人は来たこともないと言うんで。へッ、驚くでしょう、こいつは」

「何んだと」

「浅川という浪人の後ろ姿を見たことがあると言え——と脅おどかされたんだそうですよ」

「本当か」

「本当にも本当でないも、——今聴いて来たばかりの煙の出るところ、お米坊

はあれでなかなか良い娘ですよ。親分、ことによつたら」

「馬鹿ッ、それどころじゃないぞ。もういちど行つて見よう。来いッ、八」

平次は三つ股から音羽まで飛びました。続くガラッ八、源吉、四方はもうすっかり暮れて、彼方、此方には灯も入っております。

お小夜の家へ来て、一番先に飛込んだ平次。

「居ないッ」

ひどく息がはずみません。

「井戸端かも知れませんか、親分」

「うん」

家の中を突き抜けて裏口へ出ると、井戸端に何やらうづく踞まるもの。

「あッ」

飛んで行つた平次の手に抱き起されたのは、もう息の絶えたお米でした。細

紐で後ろから締められて、声も立てずに死んだのでしよう。

触って見ると体温が残っておりますが、もう呼び活いけても、さすつても、息を吹返す見込みはありません。

「親分、こいつは誰でしょう」

「浅川団七郎だ」

「へエー」

「少し気が変になったかも知れない、——何をやり出すか解らない。すぐ行つて見よう」

「何処へ？」

平次はもうそれに返事もしませんでした。夕闇の中へ飛出すと、真まっすぐにぞうし 雑司やあんしつガ谷庵室へ。

ガラツ八と源吉が何が何やら解らぬなりにそれについて駈け出します。

庵室の中は貧しい灯が入って、鉄心道人は看經かんきんをおわったところでした。

「さア、道人、鉄童を何処へやった、——言つて貰おうか」

「——」

詰め寄る平次をジロリと見たつきり、道人は静かに仏壇の前を離れました。恐ろしく尊大な態度です。

「あの女は何処へ行つた——まだ判らないか、鉄童と言う女をどこへ隠した」
「？」

「氣取っている隙ひまはないぞ、お小夜を殺した下手人は、下女のお米を殺して、今度はあの鉄童を狙つて来た筈だ。半分氣の違つた人間だ、何をやり出すか判らない。さア言つて貰おう、鉄童をどこへやった」

「——」

「えッ、言わないかッ、人の命は大事だ。山師坊主に氣取られて、俺は隙ひまを潰

してはいられないぞ。三つ股の兄哥、この道人を引つ括くくつてくれ。寺社のお係りへ渡して、鰯いわしを銜くわえさして四つん這いに這わしてやる」

平次は相手がしぶといと見たか、何時にない十手を取り出してふり冠ったのです。

「――」

鉄心道人はもう一度ジロリと見上げると、さすがに力及ばなかったものか、無精らしく立ち上って裏の雨戸を引開けました。

「あッ」

驚いたことに、眉を焼くような焰ほのお。

「た、大変ッ」

庵室の後ろの納屋なやの入口から、車輪のような煙が噴出ふきして、その間からカッと焰が舌を出しているのです。

「八、後ろへ廻つて窓をブチ壊せ。中に人間が二人いるぞツ、危いから氣をつ
けろ」

「よしッ」

「三つ股の親分は、その道人を頼むッ」

平次は言い捨てて、お勝手から手桶の水を一杯、半分は有合せの筵むしろにかけて
引かぶつ被り、半分は納屋の中にブチまけて、パツと飛込みました。

×

×

納屋の中にいたのは、越後屋の兼松と弟子の鉄童。鉄童は首を絞められて、
息も絶え絶えでしたが、手当が早かったので助かり、兼松はガラツ八の糞力くそぢからで
窓から担かつぎ出されると、焼け落ちる納屋を眺めてゲラゲラと笑っております。

可哀想に氣が違つてしまったのでした。

火事が済んで氣が付くと、鉄心道人は三つ股の源吉の手から逃れてそれつき

り姿を隠しました。

庵室と納屋の焼跡を見ると、物欲に恬淡だと思わせた鉄心道人が、何百両という黄金を溜込んでいたことが発見されたのです。

何も彼も済んでから、

「あつしには少しも解らねえ。あれは一体どうした事でしょう、親分」
ガラツ八は例ものような絵解きをせがみます。

「気の毒なことに兼松は鉄心道人を活き仏のように思っていたのさ。かなりの身上も入れあげ、出来るだけの事をしたが、お小夜が弟子になって庵室へ入り込むと聴いて気が気じゃなかった」

「――」

「兼松はお小夜の前身をよく知っていたんだろう。上野の役僧を一人台なしにした事も、大旗本をつぶした事も、役者が首を縊ったことも、――お小夜が道

人の傍へ来ると、いかに道徳堅固の道人でも、万一の事がないとは言えない。道人はあの通り若くて、ちよつと良い男だ、——兼松にしては、こんなにも身も心も打込んで、身上まで入れ揚げた活き仏が、唯の人間になつてしまつてはやりきれなかつたらう。危ないものは遠くへやるに限る、道人を活き仏のままにして、心のままに信心するには羅刹女らせつじよのような女を側へやつちやいけない——多分こう思い詰めて、お小夜を殺す氣になつたのだらう。変な信心に凝り固まつて、少し氣が変になりかけた兼松は、それが悪事とは思わなかつた。それどころか仏敵を滅ぼすほろのは、功德の一つだと思ひ込んだに違ひない」

平次の絵解きは少しの無理もなく發展しました。

「——へエ——」

「ところで、兼松ほど夢中になつた人間でも、お小夜のような阿婆摺れ女あばずの命と、自分の命と取り換えちや叶わないとおもつたんだらう。仏敵は亡ぼしたい

が、自分が縛られたくない。そこで思い付いたのは、この世にない下手人を拵こぎえることだ。浅川団七郎などという浪人は、最初からこの世にない人間さ。兼松はそれを拵えて、疑いをみんな浅川団七郎に向けてしまった。うまい細工だが、自分だけが浅川団七郎を知っていると云つちや拙ますいから、田舎からポツと出のお米をだまして、やはり浅川団七郎を見たと言わせた、——それが拙ますかった」

「それを、お米がベラベラと喋舌しゃべつてしまいそうになつたんで驚いたというわけだね」

「その通りだよ。お前がお米を口説くどき落したと聴いたときは、兼松はまだお米を殺す気にならなかつたかも知れないが、鉄童が女で、鉄心道人は飛んだ食わせ者だと聞くと、フラフラと変な心持になつた」

「なるほどね」

「兼松は自棄やけになった、——その上あんまり落胆らくたんして、気が少し変へんになったんだらう。お米を殺すと鉄童もそのままにしては置けない心持こころもちになったに違ちがいない。とうとうあんな騒さわぎになってしまったのだよ、納屋へ火をつけたのも兼松だ」

「可哀想あはれなげだね、親分」

「イヤな捕物とらさ。でも、いちばん無欲むよくな顔をする奴は一番大欲たいよくで、いちばん取済とけました奴が一番臭くさいことだけは確かだよ」

「お小夜は」

「外面げめん如菩薩にょぼさつだ。金持、親分、旗本と手玉てたまに取って、自分の縹緞きりようと才智ちえで、活きき仏ぶつさまを地獄じごくに引き摺ずり込こもうとした女おんなだ。あんな女は石いしの地藏じぞうさままでモノにする気きになるだらうよ」

二人はそんな事を言いながら、江戸川縁べりを歩いておりました。

木^こ枯^{がらし}の吹く寒い日の夕方です。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和十四年十二月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 銭形倶楽部

活き仏



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>